



培はれたる小百合

丸 山 其 撰

汽笛から汽笛まで完全に十二時間てう労働の疲を浴場に洗ひ流して、さらりとした氣分の體を粘の強い夏衣に包んで北を除いた三方が氣持ち好く開放された俱樂部室の強い燭光に照し出された一人の乙女は窓ぎわのベンチの端に斜に腰を下して新刊雜誌のページを余念なしに繰り返してゐる、窓外は澄みきつた遠い廣い中秋の天空のかなたに満月には間もなさそうに思はれるお月様が黄金色の微笑顔を愛宕の山の松の梢から浮び上げて平和の雫を地上一面に投げてゐた、

外出を許された幾群かゝ通り過ぎた頃から御飯場や髪結ひ場や裁縫室や作法室の静まりとゝもに事務所に次いでひっそりとした俱樂部は折々樓下を傳ふ上草履の音の外は淋しい程の沈黙が漂つてゐた、労働以外の殆んど全部の時間は睡眠と慰安とに費されるのが通例である様に考へられてゐる労働社會殊に婦人の工場では女子の心得べき種々の家庭教師はあるにしても彼等にとつては労働その裡に見出される趣味が殆ど全部を占めてゐた。殊に學科の教師に近寄つて精神の糧を獲ようとするけなげな者はほんこに稀なものであつた、實際餘程の絶倫でない限りその第一目的である報酬は労働能率に正比例する女工としての彼等には勢力も還境も容易に許さない事實に相違なかつた、こうした雰圍氣の中に僅かの時間でも讀書に利用しようとする彼の女は秋と云へば縣外の人々の山梨と云ふ想像を裏切るであらう様な視線の限り黄金の波を打ち反へす此の工場から數里を隔てた或る農家の長女として誕生聲を擧げたのはもう十七年もの過去であつた、然し恐

しい運命の魔の手は可愛盛りの三歳にも満たない少女から誰でもが慕ふ様に彼女が慕ふた少女の母を流感てう二字に包んで運び去つてしまつた。

母を奪はれた後の彼の女は此まで可愛がつて呉れた世間の人々が追々に彼の女から遠ざかつて到底親の光りに浴することは許されなかつた、新らしく迎へられた母親の十何年かの養育を受けた彼の女のエゾロン姿が此工場に始めて見出された頃までは殆ど無意識に單調に花の旦を迎へたり月の夕を送つたりしてゐた、天使の様な無邪氣さで學校の門を潜る頃から讀み方や國史のお話しに小さな胸を踊らせては耳を傾けて聽いてゐた彼の女は一番好きなきこと云つたら折々はお友達から借りた少女世界や小學生などに眼を落すこともあつたが何時も總ての注意を奮はれて耽讀するものは家から餘り遠距離ではなくて彼の女の母が寂かに眠つてゐるお寺の所化さんからもらつた日蓮様の血と涙とで綴られてあるお傳説であつた。そして最も興味を感じるこの出来なかつた一つは他家のお婆様達から新しいお母様の事柄について問ひ掛けられた時に迷惑相に黙つてゐて話題を轉ずるのを待つ瞬間であつた、まだ幼かつた時の彼の女は水雑巾に恐れて掃除を怠つたと云つて叱られたり、打たれた音に晝寢の夢を破られたことも決して珍しいことではなかつた、或る秋祭には小使一文持たされずに八幡様のお祭りに行つた、お盆にはお友達の美しい下駄や夏衣はとぎにうつとりと見とれたことも一度や二度では濟まなかつた。

かうした程度まで枯れかゝつた白百合を最も能く培つて美しい姿にし、幽しい重りを放たせたものは彼の女の無二の遊び友達であつたお寺の所化さんに依つて練り返へされてゐる修行と云ふ範疇に入れられた寺院生活であつた。

彼の女のお友達の寺院生活に比較すれば乾燥無味な彼の女の生活ですら餘程の餘裕をはつきりと意識するに充分であつた、假令所化さんの缺點は彼の女にも認められたにしても、二年か三年に一度訪ねて呉れる唯一人の伯母様も徒らに彼の女の未知な亡い母親を連想させるより外は何の影響をも與へてくれなかつた。

斯した家庭に育つた彼の女には規則正しいが比較的眞の自由が與へられてある工場の共同生活は何とも云

へないのんびりした平和の樂園であつた。一度此の大家族の一員として抱擁されてからの彼の女はほんとに新しい生活を味ふことが出来た。

幼い時から我儘を許されない様に習慣づけられた人々が少しは陰鬱な氣質は免れないにしても總ての人から好きがられる様に彼の女の従順は事務の者からも可愛がられ、多くの新しい友達とも心から温かい深い交りを永く續けて行くことには少しの努力をも要さなかつた。極めて温和ではあるが何處となく強さを持つた彼女を折々氣の毒がらせた事柄は友達の家から贈られた四季とりどりの慰め物の分配に對するお返しとして彼の女の母からは一度も恵れなかつたことであつた、健康で勤勉な彼の女が親たちを喜ばせる稼ぎ高は家族の銘々への土産物は別としても村中の誰よりも優つてゐた、然し歸休中の彼の女の膳には既に尋六にもなつた妹の膳と同じ分量には並べられてゐなかつたのでお友達が無二に期待する休みですら彼の女の中には枯野に荒れ狂ふ野分けの風の様な冷たさが訪れるので或る時は歸休を呪いたい程でもあつた、お友達が折角訪ねて來て呉れた場合などには開業の門出を冷たいお茶漬でしほ／＼と出掛けるよりも一層痛切に情けなささ云ふものに正面に向はざるを得なかつた、温かな母の懷ろに哺まるゝお友達の境遇を模倣しようとする彼の女の標準は許されたる境遇より高すぎるにしても！

薄暗い家庭にしても彼女を休み毎に牽引するそして彼の女に取つて唯一の嬉しい心やりは假令みすばらしい身なりではあるにしても又往々復の度に軽いにもせよ荷物と一緒に缺かさず停車場まで來て呉れて無骨で僅かな言葉でも一言毎に情愛に漲つたそして獎勵と感謝の全部を含蓄させた父親の言葉が誰の父兄にも決して劣らない父らしさに感激させられることであつた。

多くの人が芝居に活動に外出する夜もその中には彼の女の姿だけは見出せなかつた、そして財布と反對に使へば使ふ程増加する智識の泉であり精神の糧になる様にと備へられた俱樂部の雑誌や新聞を透して東西古今の偉人に交つては盡きせぬ興味に浸つてゐた、そして一錢のお金でも稍ともすれば自分の爲に掻き亂されようとする家庭の平和を助長する爲めに役立たせようと努めてゐた。

澄み切つた大空の様に清涼な、月の様に圓滿な心は讀書の中からの獲物であつた、總ての誘惑を打拂ふ銅鐵の様な強く堅い心は嚴格な繼母からの尊い賜であつた、九時を告げる標子木の響きに驚かされて書物が軽く閉されたとき彼の女が唇頭に洩らした微笑は悲しみを喜びに轉換し、苦痛を安樂に開會する御祖師様の御教へに知らずくの間には培はれた小百合の花のみ法の露に潤ひたるほんこに麗しいをして充たされた喜びの表情であつた。



夢

重松ひさし

日向りの悪い陰鬱そうな六疊間もその中央に一つの火鉢が置いてある炭火が眞赤に熾熱つてかけてある鐵瓶からは濃々と白い湯氣が吐かれてゐる。上段の床の間には聖者日蓮の眞筆の寫しで此の寺の什寶だと思はれてゐる、十界の曼荼羅が懸けてある、それが光線の工合でか、いかにも古めしく、ほん物だと思わせるには充分である。

「正壽お前は佛祖の御恩を知らぬ奴だ、ようもそんな大口が言へるワイ」
こう云ふのは火鉢の前に圍まわの大きな厚綿あつたの座蒲團の上に、キッチンと尻を据へた師尙の稍々怒氣を含んだ銅羅聲である。

「お師尙さま佛様の御恩を深く思へばこそ申すので御座います、お怒りなさいますけれど事實が證明して